安曇野市公民館報

安曇野市
中央公民館
No.39 2017.11.1
TEL71-2466

ふるさと講座

東山道（とうさんどう）・小さな旅

三郷公民館は、9月6日に木船清さんを講師に迎え、奈良時代後期から平安時代の初期に、畿内から東北へと抜ける、古代律令による官道のひとつである東山道の一部、下伊那地方を巡る「ふるさと講座」を開催し、20人が参加した。

初めに「おんな城主直虎」で名をはせた高森町の「松岡城」と「松源寺」を見学した後、飯田市座光寺の「元善光寺」を拝観した。

近江（滋賀県）から美濃（岐阜県）の坂本を経て信濃へと入る東山道最大の難所として知られていた神坂峠の麓「園原」へ向かう途中、阿智村では伊那地方で二社のみの式内社である「阿智神社」前宮を参観した。

廣拯院伝教大師最澄上人像

県歌「信濃の国」に『たずねまほしき園原や…』と歌われている山村の集落である園原の里に入り、天台宗の開祖、伝教大師最澄が建てたという無料の宿泊所「廣拯院（こうじょういん）」に立ち寄った。

万葉集に『ちはやぶる神の御坂に幣奉り斎う命は母父がため』と詠まれたように、旅の安全と神坂峠の無事通過を祈願した神坂神社では、この山中の社に海の神・住吉神が祀られていることの不思議に驚き、源氏物語に詠まれた「ははきぎ」などを見学した。

松岡城址

帰り道では、「阿智神社」奥宮の石舞台と磐座を見学し、最後に「満蒙開拓平和記念館」を訪ね、改めて満蒙開拓は何だったのか、平和な社会とは何かを考えながら、講座は終了した。

出会い・ふれあい・生きがいセミナー

安曇野郷土の刀剣

豊科公民館では、9月21日、講師に松本市立博物館友の会副会長の川舩義嗣さんを迎え「安曇野郷土の刀剣」講座を開催した。

資料に基づき、用途や長さの違いによる刀の種類、刀剣各部の名称、姿・地文・刀文の見方等の基礎知識が大変分かりやすく解説された。また、日本刀の2000年の歴史には時代に適応した刀、流派の特徴が表れていることを、それぞれの代表的な刀の図や写真を用い説明があった。私たちが普段何気なく使っている言葉にも、刀が基になっているものが20数種あり、おっとり刀（大急ぎ）、鞘当て（さささいなことでのケンカ）、元の鞘に収まる（仲たがいしたもの同士が元通り一緒になる）等、刀がいかに庶民の生活に密着していたかを話された。

後半は現在の安曇野市豊科細萱の洲波（すわ）神社東に住んでいた「郷土が生んだ幕末の刀鍛冶山口兄弟」の話になり、兄の保国は「以信州有明里新鉄保国造之」、弟の保継は「信濃国人藤原保継」の銘で作刀していたという。現在も鍛冶小屋（写真上）は子孫によって修理され大切に保存されている。刀文の美しい保国・保継の刀を見せていただき、郷土の先人の作ということに親しみを感じた。

このような刀の鑑賞ができる講座はあまりなく、受講者は真剣に鑑賞し多くの質問があがった。刀を作るのには多くの職人が関わっており、それらの方々の技術の粋を結集したものであると感じた。

古きを尋ねて

㉖堀金地域を流れる拾ケ堰

「拾ケ堰」は、他の河川の流れに逆らうように東から西へ向かい、標高570メートルの等高線に沿って1キロで30センチ下る緩やかな勾配で、安曇野の田園風景の中を貫くように水路延長15キロ程の距離を流れている。地形の関係から現在の堀金小学校の東側で大きく北に進路を変え「大曲り」と呼んでいる。

「拾ケ堰」は江戸時代後期、水利確保に困窮していた当時の10ヵ村の指導者が中心になって立案した。開削までに27年の長い時間をかけた構想の下に実現され、延べ6万人の農民が工事に参加し、開削3カ月という短期間で完成させた驚異的な事業であった。堰が出来る前は畑作や養蚕だけだった農村に、約300ヘクタールの新田が開かれ周辺では稲作が始まった。「拾ケ堰」は文化13年（1816）の完成で、平成28年が開削200年に当たり記念碑が建立された。同年の11月8日には、第67回国際灌漑排水委員会国際執行理事会（IEC）において「世界灌漑施設遺産」に登録された。現在47施設が登録され、27施設が日本国内の登録である。

三郷地域から堀金地域を望む

長野県拾ケ堰土地改良区の事務局を務める青柳和義さんは「2000年たった現在も、堀金地域の中堀、上堀、下堀地区を中心に約780ヘクタールの水田が灌漑され農業用水として供給されている」と説明している。

堀金小学校4年生は授業の一環として拾ケ堰の歴史を学んでいる。昨年度の6年生は開削に関わった人たちや、拾ケ堰ができるまでを紙芝居で演じ、テレビに取り上げられた。なお堀金公民館では、公民館事業としてサイクリングやウオーキングなどを開催し、次世代に向けて啓発活動に努めている。

（東山路）

地区公民館だより

本村地区公民館（豊科）

本村地区公民館は、JR南豊科駅から200メートル西にある。地区の真ん中に位置し、大日堂・巨大文字碑道祖神・安曇野市有形文化財の神代文字碑がある。公民館のある場所は「成相氏館址」の一部であり、今も昔も地区の中心地である。

本村の歴史は比較的新しく16世紀末頃に集落が形成されたようである。人口は1300人弱である。本村公民館の役員は6人で構成されている。公民館長・副館長・主事・体育部長・文化部長・社会部長である。各種団体は17ある。最大の団体である本村勤労協をはじめ囲碁クラブ・大正琴・短歌会・詩吟・パステル画・ゴルフ愛好会などがあり、公民館を使用し活発に活動している。

敬老会

本村勤労協は、すべての公民館行事に積極的に参加し、30代から70代までの会員が幅広く世代間交流を図りつつ、地域づくりの中心的役割を果たしている。

公民館行事は、春の本村神社例大祭参加から始まり、安曇野ハーフマラソン応援・公民館研修旅行・区民マレットゴルフ大会・人権尊重懇談会・敬老会・文化祭・三九郎などがある。豊科公民館でも年間を通じてたくさんの行事があり、すべてに参加している。

文化祭

公民館役員は企画や準備で大変であるが、やりがいもある。各種団体の皆さんの協力もあり、各行事はいつも大盛況であるが、公民館役員の選出に毎年苦労するという課題もある。役員の大半は会社に勤めており、平日の公民館活動は難しい。行事や会議等もそれに合わせた形態にしないといけない。また、行事によっては、役員以外の協力を得ないとスムーズに遂行できない。いずれにせよ公民館活動を積極的に行うことにより、より良い地域作りが出来ると思われる。

（前公民館長　中澤宏晃）

グループ紹介

エコクラブ

明科の『エコクラブ』の滝沢清子代表は、定年退職後、新聞で布草履作りの記事を見て、古布を利用した布草履作りに興味を持ち、松川村まで教えを請いに出向いた。

習い覚えて作ったたくさんの布草履を友人や知人にプレゼントし「とてもはき心地が良い」と評判になった。「自分でも手作りしたいので教えてほしい」と言われるようになり、請われるままに教え始めた。仲間との会は「家庭に眠っている布を再利用しているので、エコだね」と平成22年9月頃に『エコクラブ』と名付けられ、現在に至っている。

毎月第1木曜日の午後1時から4時まで、明科公民館で創作活動をしている。『エコクラブ』は、明科はもとより松本・生坂・筑北からの参加もあり、一回毎の参加形式で、継続参加も自由にできるのが特徴で、毎回5～8人の参加者がある。

布草履を編むための治具を使い、作り方を学び、1つの作品ができあがれば辞めていく人もいるが、回毎の参加を楽しみつつ、それぞれが個々の作品を自由に製作できる事が、継続の礎ともなっている。布草履は、いろいろな布の再利用が多いが、玉ねぎの皮や草木の手染め布なども使い、素材の質を変えるなど、試行錯誤を繰り返したりしている。草履型、突っ掛け型、スリッパ型などに加え大人用、子供用もあり、カラフルかつバラエティに富んだ作品は、一つとして同じデザインが無いので、大変面白く奥深い。また、籠や小さなケースなどの作品作りにも挑戦している。

信州安曇野あやめまつりでの販売や公民館ロビーでの展示などが評判となり、浅見前公民館長に声掛けをされた事も重なり、文化祭での展示販売や講習会の開催など、次々と活動の輪が広がった。その折の新聞掲載もきっかけとなり、市内にあるホールでの展示や販売も経験した。現在は、JA松本ハイランドファーマーズガーデンあかしなどでの販売を通して、多少の実益も兼ね、エコな取り組みの拡大浸透を図っている。

滝沢清子
62・2573

私は一生懸命

安曇野市穂高文化協会会長
安曇野千成クラブ代表
佐伯 治海さん（穂高）

「ひょうたんから駒」ということわざがあるが、まさにひょうたんに案内されるように穂高文化協会へ入会した。

きっかけとなったのは昭和62年（1987）、元々は新旧住民の親交を深める目的で「町おこしになれば」とはじめたひょうたん作りだ。平成元年には「安曇野千成クラブ」を結成し、穂高文化祭への展示を行っている。角が無い「ひょうたん」のように平和な世の中になることを祈り、現在まで活動を続けている。

文化協会役員としては穂高文化祭に参画し、近年は国営アルプスあづみの公園にて正調安曇節の普及などを企画した。今年は文化協会設立50周年として記念誌『五十年のあゆみ』を発行した。創立30周年の『三十年のあゆみ』では編集長を務め、今回は会長として大役を無事に果たせた事は感慨深い。

30周年の時に1200人いた会員も高齢化のためか一時期は500人程まで減少したが、平成27年3月に会長に就任してからは小中学生が会員として入会できるように規約を変更し、現在は約700人まで盛り返してきた。またグループでの入会のみでなく個人の入会を可能にし、会員の範囲を広げた。

私の考え方の根本は芸術・文化が人づくりの基本であるということで、会員の皆さんの意志が一つになる事を望んでいる。今後は、大勢の人々が絆を深め生きがいが持てるような活動を通して、文化協会がますます発展できるよう願っている。また、若手の方々には、半世紀の歴史の継承に向けて頑張っていただけるよう希望してやまない。

絵：加々美　豊
花：ノコンギク

とよしな

安曇野の建物講座

豊科公民館は9月7日に第2回「安曇野の建物講座」（全4回）を行った。講師に長野県文化財保護協会常務理事の高原正文さんを迎え、19人が参加した。

明科の宗林寺から見学を始め同雲龍寺山門・本堂・穂高の相馬愛蔵生家の洋館・松澤求策の生家旧若松屋醤油店と隣の古川邸・碌山美術館を見学した。用意された資料をもとに説明があり、歴史を始め、建物の構造や特色を知ることができた。個人で見学すると見逃してしまう点も多いが、この講座は、講師の分かりやすい説明があるので、理解しやすく、特に寺院は建築様式も多様であり、見どころも多かった。

ほりがね

オカリナスワン ミニステージライブ

堀金公民館は9月2日「オカリナスワン」のミニステージライブを開催した。土曜日の午後のひと時、50人余が堀金支所1階ロビーのコンサート会場に訪れた。

「オカリナスワン」は、地域在住の主婦6人が集まりオカリナを始め、グループ結成15年になる。初めは楽譜も読めなかったというメンバーが「地域の皆さんと楽しい時間を過ごしたい」という願いから月2回の練習を続けている。ライブでは「ミッキーマウスマーチ」「明日があるさ」など15曲の演奏を披露した。

（東山路）

あかしな

明科の歴史探訪講座

明科の歴史探訪講座～明科の地名の由来を探る～が、9月5日明科公民館講堂で開催された。講師は、前明科支所長の西村永明さん。明科の言い伝えや歴史について、あくまで「○○ではなかろうか、○○であろう」という観点から次々と話題が展開された。

参加者60人は、おなじみの県名や明科という名称の語源や伝説にまつわる地名、地域（村）の変遷や地元に多い氏名の諸説などに声を上げつつうなずき、興味深く聞き入っていた。

みさと

地区公民館対抗 夏季球技大会

三郷公民館は8月20日、三郷文化公園グラウンドと同体育館で「夏季球技大会」を開催した。三郷地域の14地区による地区公民館対抗で、男子は「ソフトボール」を行い、各公民館から1チームが参加し優勝をかけて対戦した。女子は「ソフトバレーボール」を行い、各公民館2チームによる参加で、熱戦を展開した。各地区とも選手と公民館役員を合わせ20数人が参加、全体では300人を超える大選手団となり、盛況のうちに大会の幕を閉じた。

（東山路）

ほたか

浅川山の魅力再発見

穂高公民館は9月13日「浅川山トレッキングと自然観察会」を実施、13人が参加した。満願寺北方の北ノ沢にあるルートは、かつては牧から中房方面へ通じる唯一の道であった。講師の松田貴子さん（豊科郷土博物館）から植物の解説を聞きながら、浅川山中腹の東電鉄塔までを往復した。ここには、里では見られない珍しい植物がたくさんある。長野県版レッドリスト掲載の珍しい寄生植物を発見し講師も参加者も感動。招かれざる客の訪問に警戒する猿の声を聞きつつ、参加者一同初秋の浅川山の自然を満喫した。

欅

利用者同士で情報を共有しあう「LINE」のグループ機能は、使い方にもよるが大変便利で連絡が短時間で済む。便利な機能は、使い方を間違えると「いじめ」などの大きな問題となる。高齢になると新しい電子機器を使いこなすことが難しくなるが、新しい物への挑戦の気持ちは失いたくないものである。（H・N）